今後の人文学・社会科学の振興に向けた推進方策について（審議のまとめ）（概要）

令和７年１月17日 科学技術・学術審議会学術分科会人文学・社会科学特別委員会

1 人文学・社会科学の振興に向けた政策のこれまでの展開

2 人文学・社会科学の現代的役割について

- 人文学・社会科学は、人間の精神活動の根本・根源の理解や、社会的合意形成等を探求する学問分野であることから、社会の在り方や人間の生き方の再考に寄与するとともに、人間や社会に関する「想像力」を広げ知的好奇心を刺激することで、人間の生きる力の根源や社会の根本を支えている。
- 近年、生成AIをはじめとした先端技術が目覚ましい進歩を遂げ、世界規模の課題（感染症対策等）にもその技術の活用が見込まれているが、これらの課題は社会や文化的背景等の様々な要素とも複雑に絡み合って生じているため、自然科学の成果に加え、人文学・社会科学の力が必要となる。
- グローバル化した現代においては、多様な文化や価値観、well-beingの在り方に対する理解をもたらす人文学・社会科学の果たす役割は極めて大きい。

➡社会経済情勢や国際情勢が急激に変化する現代社会にあっては、人文学・社会科学の共通の価値・特長を踏まえつつ、果たす役割や貢献の社会的意義を絶えず再検討し、社会との接点を常に意識して、新たな知の創出に取り組んでいくことが一層強く求められる。

3 人文学・社会科学の振興に向けた更なる推進方策について

《新たな「知」の創出》

①新たな「知」の創出に向けた、分野研究の深化、異分野との連携・融合の必要性

- 我が国社会が直面する複雑化・多様化した課題の解決に資する新たな「知」を創出するためには、分野研究の深化（厚みのある「知」が人文学・社会科学分野に蓄積されていること）、異分野との連携・融合による研究の幅の広がり（人文学、社会科学、自然科学の多様な「知」をつなぎ、人間や社会の総合的理解と課題解決に資する「総合知」の創出・活用に繋げていくこと）の双方が重要。

②異分野連携・融合研究の類型

- 以下の2つに類型できる。それぞれの特性を加味しつつ、推進していく必要がある。※ただし、類型分けは、二律背反なものではなく、重複するものもある。
  - 共通の課題・事象に対して、複数の学問分野からアプローチを行い、新たな知の創出や方法論の革新を目指すもの
    さらに、感染症や差別などの社会問題といった「共通の大きな課題・事象に対して複数の学問分野からアプローチする研究」と、人間の行動などの「特定の課題・事象に対して複数の密接に関連する学問分野がつながりアプローチをする研究」の2つに分けられる
  - ある学問領域の研究のため、他の学問領域の知見や方法論を活用するもの
- 異分野連携・融合研究は、各々の分野の境目を保ったまま連携したり、境目を越境したりと、連携・融合の程度は差があるものの、研究の視点や研究手法の新規性により、分野研究を飛躍的に向上させることがある。

③異分野融合研究の推進

- 異分野融合研究における研究マネジメントの在り方（異分野間の相互理解の重要性・本来の研究分野の足場固め・若手の参画促進）
- 異分野融合研究を推進するための支援の体制・仕組み
  （異分野融合研究のニーズ把握のための場づくり、分野を超えた連携を促すファンディング、研究者のマッチング等の研究開発マネジメント
  人材による異分野融合研究の促進、研究マネジメント人材の育成・正当に評価される仕組み作り、分野を超えた共同研究の組織的な推進）
- 異分野融合研究の成果と評価（社会的インパクトを重視した評価も行うことの重要性、プロジェクトの趣旨に沿った研究成果の可視化）

《新たな「知」の創出を支える基盤》

①人文学・社会科学における研究基盤の構築・更新

- 人文学・社会科学においては、多様な資料・データやそれらを研究した成果論文などが蓄積されることで、研究基盤が形成されるという特徴があるため、多様な資料・資源の活用や共有化の前提となるデータ基盤の構築や充実が必要。
- データ基盤は、共同利用・共同研究を通じて多くの研究者に活用されるべきであり、共同利用・共同研究体制による構築・運用が期待される。

②人文学・社会科学における共同利用・共同研究体制の機能強化

- 分野研究の深化、異分野連携・融合研究の促進、その先にある新分野創成のためには、研究基盤の充実が鍵であり、それを担う共同利用・共同研究体制の機能を強化していくことが期待される。

③データ基盤の構築・運営とデータ及びメタデータの整備

- 研究のDX・オープンサイエンスが加速する中、人文学・社会科学においても世界的にデータを利活用した研究が進んでいるが、我が国においてはその前提となるデータ基盤の構築が不十分なため、データ基盤の整備・運用の推進が重要。
- メタデータ・データ規格が国際標準に対応せず、分野ごと・作成者ごとに異なることもあり、データを利用した研究が非効率になっているため、国際標準規格への対応や、相互運用性の確保に向けたデータ規格のモデルガイドラインの策定・普及が必要。

④オープンサイエンスへの対応及びデータ人材の活用を含めた支援機能の充実

- 研究データの公開にあたっては、オープン・アンド・クローズ戦略を立て、適切に保存し公開していくことが必要。
- データに通じた人材の不足、またその育成の機会も不足しているため、データの構築・利活用に通じた研究者の育成、人材育成プログラムの普及が必要。

⑤データの利活用

- データがどのようなものであるかの周知、データを学習や地域振興に活かす取組の推進、AI等を活用したデータ利活用の可能性の追究が必要。

《研究成果の可視化とモニタリング》

①研究成果の可視化とモニタリング

- 我が国の人文学・社会科学については、これまで研究活動の成果がデータとして十分に整備されていないという状況に鑑み、その総合的・計画的な振興と国民の理解増進に資するため、我が国全体の同分野の研究動向や成果を可視化しモニタリングする必要がある。
- 国際ジャーナル論文・国内ジャーナル論文の定量的な把握が困難であること、書籍の体系的な指標が存在しない、研究成果として対象となる書籍の範囲・総量が不明確といった、研究成果の可視化における課題に対する調査分析を、着実に推進する必要がある。

②研究成果の捉え方の多様性とその可視化の重要性

- 研究プロジェクトによっては、社会的インパクト等を重視した成果も重要であり、これらを測るための新たな指標等を検討し、成果の把握・可視化を進める必要がある。

《研究成果の国内外への発信》

①広報の専門人材の確保を含めた広報推進体制の構築

- 人文学・社会科学の研究者と自然科学の研究者の間で研究成果の社会一般への発信についての意識に違いがあり、人文学・社会科学の興味深い研究成果の中には社会に知られていないものも多いことから、人文学・社会科学の研究者の成果発信への意欲を高める方策を検討するとともに、組織として研究を紹介していくことが重要であり、その際、広報の専門人材を育成・確保することが重要。

②研究成果の戦略的な国際発信の推進

- 我が国の人文学・社会科学研究の国際プレゼンスを向上させるため、研究成果を国際的に発信することが必要であるが、研究成果を単に翻訳するのではなく、背景にあるコンテクストも含めて発信する必要がある。

※今後特に検討すべき事項：人文学・社会科学の**①研究基盤、②共同利用・共同研究体制、③研究成果の可視化とモニタリング**